



大学図書館問題研究会 近畿4支部新春合同例会のご案内

『広報にキャラクターを活かす』

日 時：2010年2月6日（土） 14:00～16:30（受付13:30～）
 ※終了後、懇親会を予定しております。
 会 場：奈良県中小企業会館 中会議室 A
 〒630-8213 奈良県奈良市登大路町 38-1
 TEL:0742-26-6602（近鉄奈良駅1番出口すぐ）
http://www.pref.nara.jp/dd_aspx_menuid-5665.htm
 （アクセス：http://www.pref.nara.jp/dd_aspx_menuid-5687.htm）
 参加費：無料
 （大学図書館問題研究会の会員でない方もご参加いただけます）
 懇親会会費：5000円（当日、受付でお支払いください）

【内容】

『大学の図書館』27(9)にご寄稿いただいた嶋田晋さんをお招きし、筑波大学図書館のキャラクター（がまじゃんぱー・ちゅーりっぷさん）の活用についてご講演いただきます。
 また、平城遷都1300年にちなんで、その公式キャラクター（せんとくん）をテーマに、広報事例をお話しいたします。

■問い合わせ・参加申し込み

奈良支部事務局 土井 (doikim@ex.osaka-kyoiku.ac.jp)

※当日も受付をいたしますが、準備等の都合がありますので、
 参加を希望される方は、なるべく1月31日（日）までに、
 上記メールアドレス宛にお申し込みくださいますよう、お願いいたします。
 その際、お名前・ご所属・懇親会参加の有無をご連絡ください。

【目次】

新春合同例会のご案内	…	1
10年続く勉強会 - (京都大学図書系職員勉強会の紹介)	石原 三輪子	… 2
カンボジア・大学図書館訪問記 etc	坂本 拓	… 4

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。
 電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp（大学図書館問題研究会京都支部）
 URL：<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

10年続く勉強会 ― (京都大学) 図書系職員勉強会の紹介

石原 三輪子

京都大学の図書系職員勉強会（仮称）は、2009年12月14日現在で10年目・118回を迎えました。本稿は、自主運営に成功した勉強会の一例として、その概要をご紹介しますものです。私は勉強会歴2年の新参者に過ぎませんが、幸いにも勉強会の節目に居合わせ、また現在の幹事のお話をうかがうことができましたので、ここに記します。

(1) 勉強会の概要

- ・名称（※仮称）：ku-librarians 勉強会、図書系職員勉強会
- ・開催頻度：月1回、18:30-20:30の2時間程度＋懇親会
- ・開催場所：附属図書館ラウンジ・ライブラリーホールや講義室など
- ・幹事：2人
- ・参加対象：図書系職員、または興味のある方なら誰でも可。参加申込・予習は不要
- ・ML：勉強会の予告・報告、情報交換など
- ・HP：<http://kulibrarians.hp.infoseek.co.jp/>（※これまでの記録・レジュメ有）

《参加者について》

参加対象には、常勤・非常勤、また学内・学外の制限はありません（多いのは、学内の若手の常勤職員ですが）。各回の参加人数は5人から30人まで様々です。

《テーマ》

テーマは大まかに3パターンに分けられます。

(A)参加者自身による発表：主に業務に関する内容で、意見交換の場を兼ねています。

例：第118回「電子リソース管理業務の舞台裏」（渡邊英理子氏）

(B)外部講師による講演：図書館やその周辺についての研究動向を知ることができます。

例：第109回「Wikipediaをいかに使いこなすか？」（清田陽司氏）

(C)交流会：学内他組織や学外の図書館員とのネットワークを作るための会です。

例：第108回「京都大学学術情報メディアセンターコンテンツ作成室との交流会」
第99回「京都図書館情報学学習会との合同勉強会」

(2) 参加するメリット

私はこの勉強会に2年間参加し、1度の発表を経験しています。その中で感じたメリットは次のとおりです。

《参加者として》

- ・人的ネットワークを広げられる
- ・幅広いテーマについて勉強できる
- ・発表者のプレゼン方法を参考にできる

《発表者として》

- ・自分自身で状況・問題点を整理できる
- ・参加者から意見をもらえる
- ・プレゼンの練習になる

一番の魅力は、人的ネットワークを広げられることだと感じます。今でこそWG等の機会もありますが、学内には勉強会でなければ知り合えなかった方達が大勢おり、「ここ

で繋がらないと孤立する」ような感覚は今でもあります。実際に、顔見知りが増えるだけで随分仕事が進めやすくなりました。

(3)10周年記念企画より

2009年11月、勉強会の10周年記念企画として「ARGとku-librariansの10年—これまでとこれから」と題するパネルディスカッションが開催されました(※第117回)。

「(ARG/勉強会が)なぜ10年続いたのか?」という疑問に対し、パネリスト4人(岡本真氏(ACADEMIC RESOURCE GUIDE(ARG))、赤澤久弥氏(奈良教育大学学術情報研究センター図書館)、天野絵里子氏(国際日本文化研究センター)、江上敏哲氏(国際日本文化研究センター))と、勉強会創設期からのメンバーであった呑海沙織氏(筑波大学大学院図書館情報メディア研究科助教)は次のように答えました。

(岡本)メルマガはキリ番や部数が目標になるし、目標はその程度でいい。いつでもやめられるから続く。

(赤澤・天野・江上)先輩の失敗から、参加者に義務を課さないことと、中心人物をつくらないことを設定してスタートした。

(呑海)勉強会は最低3人いればできる。自分にとっては、勉強よりも交流がメインだった。

つまるところ、長く続けるには気張り過ぎない「ゆるさ」が秘訣であるようにも聞こえます。しかし、実際には幹事は多大なる負担とプレッシャーを背負っているのではないのでしょうか?この疑問をはじめとして、テーマや講師の決定方法について、現在の幹事である大西賢人氏(京都大学附属図書館情報管理課電子情報掛)と林豊氏(京都大学附属図書館情報サービス課相互利用掛)にお話をうかがいました。

(4)現在の幹事へのインタビュー

(※敬称略、名字を冠していない回答は共通意見)

Q1: 幹事の仕事内容とその分担は? 任期はある?

A1: 仕事内容は、企画、連絡調整、MLでの案内、宣伝、当日のセッティング、webサイト管理。隔月でそれぞれが全てを担当する。任期はない。

Q2: テーマはどうやって決めている?

A2: 業務系と勉強系を交互に開催してバランスをとっている。

(林) 普段から情報収集し、実現可能性が高い企画から実行に移す。他大学の図書館員にも役に立つネタ、トレンドのネタを意識している。

(大西) 業務系の回は、京大職員同士の交流と業務への理解の深化が目的だが、彼らに発表の場を提供することも狙い。勉強会から業務へフィードバックができるとうい。

Q3: 外部の講師はどうやって呼んでいる?

A3: (林) 知人に紹介してもらったり、直接メールを送ったり。講師招聘用の予算がないという困難を除けば、外部の人の方が快く引き受けてくれる事が多い。

Q4: 負担やプレッシャーは感じないか?

A4: 1ヶ月に1回はやるというノルマは破らないよう腹を括っている。講師が見つからなかったら、自分で勉強して話せばいい。それほど負担は感じない。

(林) 勉強会の運営で一番得をしているのは自分たち幹事。

Q5：その他補足があれば…

A5：(大西) 開催場所の確保が意外に難しく、主に附属図書館に支援いただいている。

負担がなく、興味のある回だけ参加できるという気楽さが、参加者から見たこの会の特長でしょう。その背後では、幹事が各回バランスの取れたテーマを設定し、業務にフィードバックできる内容を工夫してくださっていました。これだけ整った環境にあつては、「参加者」は参加するだけにとどまらず、「質問者」や「発表者」にもなってみなければ勿体無いようです。楽に勉強できる会ですが、幹事を含め、誰でも力を入れれば入れた以上の成果を得られる場に違いありません。

最後に、いつもお世話になっている2人の先輩に敬意と感謝の念をこめ、筆を擱きます。

いしはら みわこ (京都大学文学研究科閲覧掛)

カンボジア・大学図書館訪問記 etc

坂本拓

2009年8月末から9月上旬にかけて10日間ほどベトナムとカンボジアを旅してきました。その際、カンボジアの大学図書館を訪問し、かなり印象深いお話を聴くことができたので、その報告とそれに関する少しの考察を、旅の様子も含めてここに記したいと思います。

[ハノイの街]

最初に、関空からバンコク経由でベトナムの首都・ハノイに飛びました。ハノイ師範大学(日本でいう教育大学)で、ベトナムの民族音楽を研究している大学時代の友人Bと会うためです(ちなみに彼自身、ファゴットの達人)。本当は彼の留学しているハノイ師範大学の図書館も見かけたのですが、その日は日曜日で閉館していたので、無理とのこと。残念。

しかし、ハノイはすごい街です。みんな、ふつうのミニバイクに、ノーヘルメットで4人乗りとか5人乗りとかして、車と同じぐらいのスピードで走っています。年間の交通事故の死者数は日本の2倍以上らしいです。また、まだ裕福な国ではないので、屋台で食事をしていると、必ず物乞いが寄ってきます。しかし屋台で食事をしている人は、みな例外なく物乞いをしている人に、小銭を渡していました。友人Bいわく、ベトナムはもともと社会主義の国なので、余裕のある者が貧しい人に分け与えるのは当然のこととして考えられている、のだそうです。以前グルジアでも同じような光景をよく目にしたのですが、これもやはり元社会主義国家であった、という経緯に由来するものなののでしょうか。Bとも積もる話を十分にすることができたので、ハノイには2泊だけした後、旧市街の安そうな旅行店でプノンペンまでの航空券を買って、それですぐにカンボジアへ飛びました。

[虐殺と貧困]

カンボジアの首都・プノンペンには合計4泊しました。1日目は、ブラブラ街を歩いて過ごし、2日目に、クメール・ルージュ（カンボジア赤軍）による虐殺場だったキリング・フィールドに行きました。この日は天候に恵まれ、雨季には珍しく晴れてやわらかい日差しが差し込む日でした。しかし、アウシュビッツでも感じたのですが、あまりにも多くの人が無念な死を遂げた場所というのは、なにか、空気が違います。静かなのです。静寂とは、単純に音が鳴っていない、という状態を指すではありません。入口では観光客を送り迎えしたタクシーの運転手たちがクラクションを鳴らしたり、談笑したりしていますが、それをかき消すほどの静寂が空気を支配しています。

ベトナム戦争後、シハヌークとの協力で政権をとったクメール・ルージュは、極端な原始共産主義を国策として導入し、学問をおさめた人間は社会の害であるとみなして、100万人近い人を皆殺しにしました。研究者、作家、教育関係者、公務員、図書館員、こういった人たちをです。このために現在カンボジアは、国を担う人材が全くおらず、他の途上国よりもさらに悲惨な状況に置かれています。キリング・フィールドとトゥースレン博物館。カンボジアに行ったらこの二つの施設は絶対に訪れてください。アウシュビッツよりも、なまなましい虐殺の記録を見ることができます。そして、その悲惨な歴史までもを、露骨に観光客向けの商売道具にしている、この国の貧しさも感じられると思います。

[プノンペン国際大学]

次の日に、プノンペン国際大学の図書館を訪問しました。一応、事前に連絡はとりあっていたのですが、最後にこちらから希望日時を告げたメールに返信がなかったので、少なからず不安な気持ちでした…。

プノンペン国際大学は郊外にあるのですが、とても近代的で清潔な大学です。市の中心部にある他の大学に比べ、「カンボジアにもこんな大学があったんだ…」と驚いてしまいます。

図書館が入っているはずの生命科学棟のインフォメーションで場所を訊いて、図書館にはすぐにたどりつけましたが…とても小さな図書室です。予想していたよりもはるかに。広さとしては、大学の80人収容の教室ぐらいでしょうか。閲覧席は2人がけの机が、3列スクール形式で並んでおり、カウンターが一番奥にあります。そしてそのカウンターの奥が書庫になっていて、出納で利用者に渡す、という形態になっていました。最初に私が入っていくと、「見慣れぬ外国人が来た」、とスタッフの方々が困惑されているのを見て、アポイントメントを取るのに失敗したことを覚りました。

向こうのWeb担当者ややりとりをしたメールの文面をプリントアウトした紙と、英語の名刺を渡して、英語で要件を伝えました。しかしスタッフの人は誰も英語ができないらしく、インフォメーションのスタッフを呼びに行きました。やってきたインフォメーションのスタッフが言うには、私がメールでやり取りをしていたWeb担当者のアンビンさんというのは、実はこの大学の医学部長の教授で、今は会議中なので、2時間後なら会うことができる、とか。いや、別にそんなエライ先生のお時間を頂戴しなくても、ただ図書室を見てちょっと解説してもらえたら良いだけなんですけど…。と言ったら、「絶対にアンビン先生に会った方が、あなたのためになる。」と。

しかたなく、図書室の閲覧席に座って利用者の行動を眺めたりしながら時間を潰していたら、ジャイアンみたいなイカツイ男が私のところにやってきました。ラッチャという酒臭いその男と握手をして挨拶をすると、彼もこの図書室のスタッフだが、彼だけは英語ができる、ということでした。アンビン先生のお時間ができるまでの間は、彼に図書室を案内してもらおうことになりました。ラッキー！

プノンペン国際大学は、多くの学部をもつカンボジアでも屈指の総合大学なのに、日本の高校みたいな小さい図書室が一つあるだけです。まず、資料について説明します。この図書室は資料予算がゼロです。したがって、所蔵している資料はすべて寄贈図書です。寄

贈元は、ほとんどがアメリカやシンガポールの出版社、あるいは米国内のアジア方面への援助団体で、そのため所蔵資料のほとんどすべてが、中古の英語のものか、わずかなロシア語のものです。彼らの母語であるクメール語の本は一冊たりとも無いのです。ラッチャは何度も私に、「君の大学はどこから一番たくさん寄贈をもらうんだ？」と訊いてきました。しかし「日本からだ。」としか答えられない私に、自分の英語力が原因でコミュニケーションができていないのだと彼は思い、何度も「ひどい英語で申し訳ない」と謝っていました。…ちなみに、後日プノンペンを中心部の本屋にも行きましたがそこもやはり古本と思われる英語の本しか置いていませんでした。絵本も、英語のディズニーのものばかりで、子どもが絵本を手にとって親に読んでくれとせがむのですが、親も英語が読めないの、悲しそうな顔で、絵を指さすぐらいしかできていませんでした。この国では新聞以外、クメール語で書かれたものが出版されていない、いえ、出版できないのです。これもクメール・ルーージュの残した大きな負の遺産です。文字を失うことの恐ろしさの一部を、垣間見た気がしました。

話を戻します。図書室の所蔵資料は合計1万冊ほどで、その半分が未整理とのこと。整理方法としては、DDC21で分類して請求記号を振った後、館内の端末で検索できるようにデータ入力をしているそうです。残念ながらこの日はトラブルのために大学内のすべてのシステムがダウンしており、実際のデータベースの画面は見せてもらえませんでした。紙に打ち出しているものを見せてもらおうと、それは、書名、著者名、出版年、出版社、という最低限のことがエクセル状のテーブルに記載されているシンプルなものでした。当然、他の図書館とのデータ連携やILLなんて行われていません。

運用に関しては、利用者が端末で必要としている資料の請求記号を調べ、それをカウンターの職員に言って出納してもらう、という形式です。ただし、その際に利用者は学生証を預けなければなりません。また、原則館外持ち出しは不可能で、2冊以上の副本がある資料のみ、1週間の貸出（最長3週間まで更新可能）ができるということでした。この場合は、担保として5ドルというかなりの大金を預かるということです。できることなら全ての図書を貸出したいが、利用者が頻繁にやって来て資料は引っ張りだこなので、それができないんだ、と言っていました。

このプノンペン国際大学は、カンボジアで唯一医学部を持つ大学なので、蔵書の中でも医学系のものが多く、ラッチャも、やはり医学分野がこの図書室で一番重要な資料だ、と言っていました。しかし、これらの資料のうち、いったいどれだけが本当に学生が読むにふさわしいものなのだろうか、と強い疑問が頭から離れませんでした。でもこの利用者は、その資料を大切に大切に、使いまわしているのです。雑誌もたったの2タイトルしかなく、やはり寄贈雑誌です。そのうちの一つは、最新号が、1999年でした…。私がしつこく雑誌について質問をするので、ラッチャは「なぜ君はそんなに、ジャーナルなんかにこだわるんだ??」と不思議がっていましたが、理由を説明すると、一応は納得をしてくれました。

そうこうするうちに、アンビン先生のお時間が頂戴できることになったので、先生のオフィスのある、プノンペン国際大学附属病院までラッチャに連れて行ってもらいました。この附属病院は、カンボジアでは考えられないぐらいキレイで設備の整った病院です。一般的な日本の病院よりもはるかに。

医学部長のアンビン先生は、インド出身で、この大学に来る前はドバイの大学におられたそうです。英語がこの上なく流暢で、これまでカンボジア人のたどたどしい英語に安心しきっていた私はややあせりました。…やはりこのようなポジションを任せられる人材がカンボジアにはいないので、アンビン先生のようなお雇い外国人を連れてくるしかないのです。

アンビン先生がおっしゃるには、政府は大学教育には全く財政援助をしないので、この

大学は学生の授業料と海外からの援助だけで運営されている、ということです。もちろんカンボジア人の学生からそんなに高い授業料なんて取れませんし、このような背景では図書室に資料費なんてつくはずがありません。もちろん先生たちも自分のことだけで精一杯なので、自分のささやかな研究費で買った資料を、自分以外の者に利用させるなんてことは考えていません。

アンビン先生は当然、医学という分野における学術雑誌の重要性は認識されており、十分なジャーナルが無いことで研究、実務ともに不自由な思いをされているそうです。しかしフランス等の先進国の実習生を受け入れているので、彼らから最新の情報を教えてもらっている、ということでした。彼らには実地での研修環境が与えられ、カンボジアとしては人材と情報が手に入る、というやや皮肉な WinWin が成立しているのです。

アンビン先生に、WHO の HINARI というプロジェクトをご存知ですか？と訊いたところ、全く知らないということでした。年間、国民1人当たりの平均 GDP が約 2000 ドルであるカンボジアなら、年間 1000 ドルを払うことで、熱帯医学を除くほぼ全ての医学関係の電子ジャーナルが読み放題になる、と伝えると大変興味を示されていました。

やはり、HINARI が、WHO のプロジェクトであることの意義は大きいと思います。大抵の途上国は、政治体制にも大きな問題があります。そのような政府と HINARI の話をする時に、もし IFLA の名前を出しても相手にはされないでしょうが、国連の専門機関である WHO の名前だと、反応せざるを得ないでしょう。きっとアンビン先生も、もし HINARI が、WHO のプロジェクトではなく、IFLA のプロジェクトだったら、私の話をここまで熱心には聴いてくれなかったのではないかと強く思いました。

[スラムへ]

次の日、私はスタミエン・チャイという地区に行きました。カンボジアはアジアでも屈指の貧しい国ですが、幸いにもアンコールワット等の観光資源があるため、政府は観光客集めに重点をおいた開発をしています。その関連で外国人観光客のための大型ホテル、ショッピングセンターの建設を最優先政策として進めているのですが、政府は時には軍隊まで用いて、建設予定地に住む多くの住民を強制移住させています。しかしその移住先は上下水道、電気、学校などが無いため、実質的にはスラムになってしまうのです。

この日、私が訪れたスタミエン・チャイという地区は、プノンペン中のあらゆる廃棄物が集められる巨大なゴミ山があり、その山を囲んでスラムが形成されているところです。海外のメディアが一時社会問題としてこのスラムを大々的に取り上げた関係で、体面を気にしたカンボジア政府は、ゴミ山の入口にゲートを設け、ゴミを漁るスラムの住民が立ち入れないようにしました。本質的な問題を全く改善しようとはせずに。

そのため、私を運んでくれたトゥクトゥク（バイクの後ろにリアカーをつけた乗り物）の運転手は、スラムの中を通過して、ゲートの反対側から私をゴミ山に入場させてくれました。この山は、吉田山の2倍ぐらひはありそうな大きさで、その山肌には今まで見たことのないようなドス黒い不気味な水が流れています。さまざまなゴミから染み出した水なのでしょうが、墨汁かエスプレッソコーヒーと同じぐらひ真っ黒です。生ゴミ、プラスチック、割れた瓶、など様々なゴミが積み上げられている中を登って行くと、先が見えないぐらひ広いゴミの平原に出たのですが、驚いたことに、目の前にある、さっきのドス黒い水たまりの中で、子どもが水浴びをして遊んでいます。3つぐらひの子でしょうか。男の子二人が全裸で、飛びこんだり水をかけあったりして遊んでいるのです。…間違いなく彼らが発癌する確率は私たちの何百倍になっていることでしょう。

周りを見ると、腰をかがめ火かき棒のようなもので黙々とゴミを掘り返している人たちがあちこちにいます。その中にはまだ小学校に上がる前ぐらいの子どもも少なからず混じっています。ここへ来る途中に運転手が、「あそこは子どもがたくさんいるが、ほとんどが親のいない子どもだ…」と言っていたのを思い出しました。

彼らは、注射針などの危険な医療廃棄物がかなり混じっている中を、裸足のままで黙々とゴミを漁っています。そのうち一番近くにいた5歳ぐらいの女の子に、クメール語で「こんにちは！」と声をかけると、火かき棒を動かす手をとめて、私の顔を見上げました。しかし垢にまみれたその顔にはもう人生の疲れが滲み出ています。髪さえ白ければ、老婆と見間違えても不思議はないぐらいです。人生と世界に対する、失望も諦めも乗り越した無関心、とでもいうものがこびりついている彼女の目に、次の言葉を出せないでいる私を置いて、彼女はまた仕事に戻っていきました。

しばらく進み、本来の入口である、ゲートの手前まで来ました。するとここには、「スラムの子どもに健康と教育を授ける施設」と英語で書かれた建物が2つ建てられています。帰国後に調べてわかったのですが、この施設は、心あるカンボジアの富裕層による NGO、**Vulnerable Children Assistance Organization** が作った、孤児の自立支援施設でした。この中では、さっきの少女とは対照的に、嬌声をあげながら子どもたちが走り回っています。これが子どもの本来の姿なのでしょうが、ゴミ拾いをしている子どもたちこそ、実は親のいる子どもで、親にゴミ拾いを強制されているのではないかという気がしました。

このあと、帰国まで2日余裕があったので、足を延ばしてアンコールワットに行き、故・一ノ瀬泰造氏が下宿されていた食堂で、氏の撮られた非公開写真を見ながら食事をすることもできました。

この旅から帰国して3週間後に異動があり、いま私は山奥にある工学部の図書室で働いています。ここはグローバル・サーティイの関係か、留学生、とくに英語を母語としないアジア系の留学生がとでもたくさん来てくれる図書室です。その中にはカンボジア人の学生もいます。彼らにとって、探している1冊の資料の重みというのは、日本の学生のそれとは本質的に異なるものなのでしょう。ある人にとっては、一生のうちで、この留学が終われば二度と手にすることができない資料になるのでしょうか。他キャンパスに欲しい資料があり、取り寄せが必要な時は、OPAC 詳細画面の情報のほぼ全てを手書きでメモしてやってくる。そんな勤勉な彼らのためなら、私もどんな残業にだって耐えてみせますよ。

さかもと たく (京都大学工学研究科地球系桂暫定図書室)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2009年度(大図研会計年度2009.07 - 2010.06)に入っておりますので、2009年度の会費の納入をお願い致します。また、2008年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000 (大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000) です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp)、または支部委員(組織・財政担当)の渡邊伸彦(〒606-8317 京都市左京区吉田本町 京都大学附属図書館資料管理掛気付 渡邊宛 電話：075-753-2647) まで。